

平成 17 年度経済産業省委託調査報告書

進路選択に関する振り返り調査

大学生を対象として

概要版

平成 17 年 10 月

株式会社ベネッセコーポレーション

目次 進路選択に関する振り返り調査 大学生を対象として 概要版

調査概要 3

1 . 小・中学校時代の体験.....	7
1 . 小・中学校時代の体験 7	
2 . 教科の好き嫌いと大学入学試験.....	9
1 . 教科の好き嫌い 9	
2 . 大学入学試験 11	
3 . 教員志望者の教科の好き嫌い 12	
3 . 進路選択の不適合.....	13
1 . 進路を選択するときの悩み 13	
4 . 大学の教育に対する意識・満足度.....	14
1 . 大学への進学理由 14	
2 . 大学や学部・学科選択で重視したこと 15	
3 . 大学や学部・学科についての満足度 16	
4 . 専門領域の学びに必要な能力や態度 19	
5 . 大学生の進路選択過程.....	21
1 . 大学生の進路選択過程 21	
6 . 大学卒業後の進路選択.....	22
1 . 希望する進路 22	
2 . 就職先を決めるときに重視すること 23	
3 . 職業に関する意識 24	
7 . 女子の理工学系統への進学.....	26
1 . 小・中学校時代の活動や体験 26	
2 . 高校時代の進路選択過程 28	

調査概要

詳細は、報告書 p.6～13 を参照

1．調査目的

本調査は、大学生を対象にして進路選択に関する振り返り調査を行うことにより、文系・理系、大学での専門領域、進学する大学の決定などの進路選択に影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的としている。とくに、理工系領域に進学した学生の進路形成や能力形成について詳細な分析を行うことで、同領域における高等教育段階までの人材育成の実態と課題を検討している。

*なお、本調査は、平成16年度に経済産業省より委託を受けた『理工系人材の育成・確保に関する実態調査』の一環として実施されたものである。

2．調査概要

(1) 調査テーマ

大学生の進路選択に関連する要因。

(2) 調査方法

郵送法による自記式質問紙調査。

(3) 調査時期

2005年1～2月。

(4) 調査対象

株式会社ベネッセコーポレーションが所有する「進研ゼミ・ゼミレポーター*（大学生）」の名簿から、全国の4年制大学に通う文系男子学生2,500名、文系女子学生2,500名、理系男子学生2,500名、理系女子学生2,500名、合計10,000名を抽出した。

*ゼミレポーターとは、弊社「進研ゼミ」の元会員を母体としており、大学等に進学する際に、後輩となる進研ゼミ会員のために、教材制作や各種情報サービスへの協力を申し出てくれた協力スタッフの組織で、全国で約45,000名の大学生（大学院生も含む）が登録をしている。

*ここで言う「文系」「理系」の区分けは、登録時に大学生本人が申告した大学の学部（学群、学類）学科（専攻、課程）コースをもとに、弊社で分類を行ったものであり、調査対象の抽出にのみ使用している。なお、本調査の分析で用いている「文系」「理系」の区分けは、今回の調査対象者に対して、「大学で専門としている学問領域は、文系・理系のいずれに該当すると思われますか」とたずねた結果をもとに行っている。

(5) 回収結果

調査票の有効回答数は 6,463 通 (配布数 10,000 通、回収率 64.6%) である。

(6) 調査項目

調査項目は以下の通りである。

小・中学生のころのことについて

- ・小・中学校時代の保護者のかかわり
- ・小・中学校時代の経験

高校生のころのことについて

- ・高校時代の教科の好き嫌い
- ・進路を決めるときに影響したこと
- ・進路を決めるときに意見を参考にした相談相手
- ・参考にした情報源
- ・進路を選択するときの悩み
- ・高校時代の進路変更

大学受験や現在通っている大学について

- ・大学への進学理由
- ・大学や学部・学科選びで重視したこと
- ・大学や学部・学科の満足度
- ・大学に関する入学前の情報と実際の大学とのギャップ
- ・学びに必要な能力や態度
- ・普段の学生生活

文系・理系の選択や進路選択について

- ・進路選択の時期
- ・大学入学後の専攻分野の変更

将来の職業選択について

- ・希望する進路
- ・希望する業種・職種
- ・就職先を決めるときに重視すること
- ・職業に関する意識や自己理解

3. 回答者の特性

(1) 性別

回答者の性別は、「男子」が43.8%、「女子」が56.1%、「無答不明」が0.2%であった。

(2) 学年

回答者の学年の内訳は、「1年生」が29.6%、「2年生」が24.0%、「3年生」が24.4%、「4年生」が21.9%、「無答不明」が0.1%であった。

(3) 在籍大学・学部

設置元

それぞれの設置元に在籍している回答者の内訳は、「国立」が36.4%、「公立」が9.7%、「私立」が53.9%、「無答不明」が0.1%であった。なお、文部科学省の『平成16年度学校基本調査』にれば、4年制大学のうち学生が在籍している大学の内訳は、「国立」は18.3%、「公立」は4.2%、「私立」は77.5%となっており、本調査では、実際の国公立の構成よりも国立大学の比率が高い。

在籍学部

回答者の在籍学部の比率は、「人文科学系統」21.2%、「社会科学系統」17.1%、「教育学系統」6.9%、「理工学系統」24.1%、「医歯薬看護学系統」14.6%、「農水産学系統」6.2%、「その他」9.2%であった。文部科学省の『平成16年度学校基本調査』とは学部分類が異なるが、人文科学系統、理工学系統、医歯薬看護学系統の比率が高く、社会科学系統の比率が低い。ちなみに、各学部系統の内訳は、以下の通りである。

- ・人文科学系統.....「人文学系統」16.5%、「外国語学系統」4.8%
- ・社会科学系統.....「法学系統」7.2%、「経済・経営学系統」9.9%
- ・教育学系統.....「教育学系統」6.9%
- ・理工学系統.....「理学系統」6.4%、「工学系統」17.7%
- ・医歯薬看護学系統...「医歯薬看護学系統」14.6%
- ・農水産学系統.....「農水産学系統」6.2%
- ・その他.....「生活科学系統」2.8%、「芸術学系統」1.8%、「体育学系統」0.9%、
「その他・学際学系統」3.7%

性別（学部系統別）

在籍学部ごとの男女比率は、「人文科学系統」が男子32.2% < 女子67.7%、「社会科学系統」

が男子 66.3% > 女子 33.6%、「教育学系統」が男子 38.8% < 女子 60.9%、「理工学系統」が男子 63.2% > 女子 36.6%、「医歯薬看護学系統」男子 16.3% < 女子 83.5%、「農水産学系統」が男子 36.0% < 女子 63.8%、「その他」が男子 29.1% < 女子 70.6%であった。文部科学省の『平成 16 年度学校基本調査』とは学部分類が異なるが、理工学系統、医歯薬看護学系統、農水産学系統において女子の比率が高い。これは、理系女子も全体の四分の一を抽出したためだと考えられる。

設置元（学部系統別）

回答者の在籍学部の設置元の比率は、「人文科学系統」が、国立 20.0%、公立 9.2%、私立 70.6%、「社会科学系統」が、国立 20.7%、公立 7.3%、私立 71.9%、「教育学系統」が、国立 78.8%、公立 1.6%、私立 19.6%、「理工学系統」が、国立 50.2%、公立 6.7%、私立 43.1%、「医歯薬看護学系統」が、国立 32.7%、公立 22.0%、私立 45.3%、「農水産学系統」が、国立 57.3%、公立 6.2%、私立 36.5%、「その他」が、国立 24.5%、公立 11.9%、私立 63.4% だった。文部科学省の『平成 16 年度学校基本調査』とは学部分類が異なるが、いずれの学部系統でも国立大学、公立大学の比率が高い。

（４）文系 - 理系

回答者に大学で専門としている学問の領域をたずねたところ、「文系」が 25.1%、「どちらかという文系」が 13.1%、「文系と理系の中間」が 11.2%、「どちらかという理系」が 12.6%、「理系」が 35.3%、「どちらでもない」が 1.8%、「無答不明」が 1.0%であった。

なお、本文中においては、「文系」と「どちらかという文系」を『文系』、「理系」と「どちらかという理系」を『理系』として分析している。

（５）COE 採択回数

回答者が在籍している大学が 21 世紀 COE プログラム（平成 14～16 年）に何回採択されているかをみた。「0 回」の大学に在籍している比率が 55.1%、「1 回」の大学に在籍している比率が 23.0%、「2 回」の大学に在籍している比率が 15.4%、「3 回」の大学に在籍している比率が 6.5%、「無答不明」が 0.0%であった

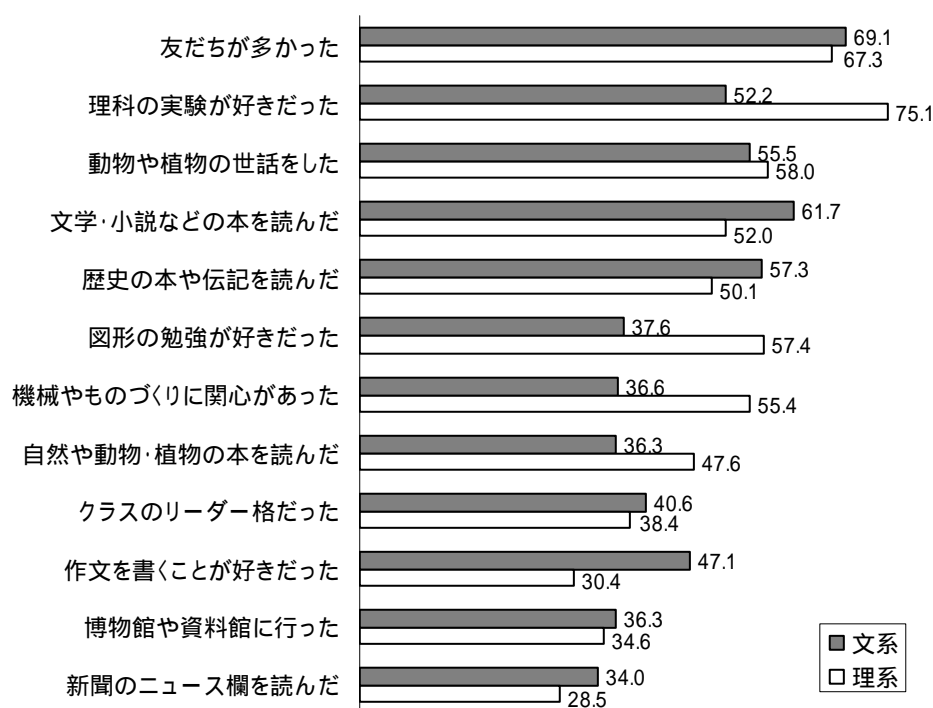
* 「21 世紀 COE プログラム」の審査要項によると、その目的は、「我が国の大学に世界最高水準の研究教育拠点を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため、重点的支援を行い、もって、国際競争力のある個性輝く大学づくりを推進すること」となっている。平成 14～16 年度の 3 年間で、93 大学 274 件が採択されている。

1 . 小・中学校時代の体験

1 . 小・中学校時代の体験

詳細は、報告書 p.23～38 を参照

図1 - 1 小・中学校時代の体験（文理別） 報告書 p.25



* 数値は「とてもそう」と「ややそう」の合計 (%)。

* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は、図から省略した。

文系志向と理系志向は小・中学校時代にすでに分化している。

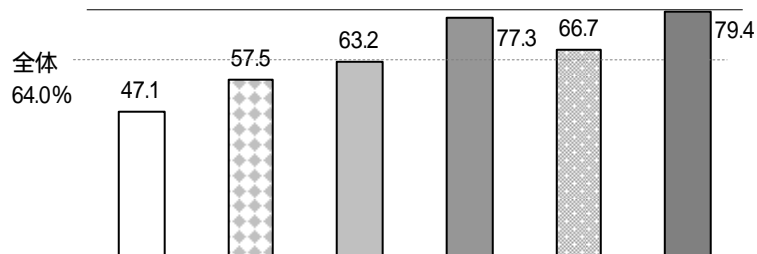
小・中学校時代の体験についてたずねたところ、文系学生に多いのは「文学・小説などの本を読んだ」「歴史の本や伝記を読んだ」「作文を書くことが好きだった」「新聞のニュース欄を読んだ」であり、理系学生に多いのは「理科の実験が好きだった」「図形の勉強が好きだった」「機械やものづくりに関心があった」「自然や動物・植物の本を読んだ」であった。理系に進んだ学生は、すでに小・中学校時代から理系に特徴的な活動を好んで行い、文系に進んだ学生は文系に特徴的な活動を好んで行っている。こうした傾向は、進路選択のプロセスにも影響を与えていると推察される。

小・中学校時代の保護者とのかかわりをも、総じて、会話でのコミュニケーションは文系学生に多く、野外活動や作業などの体験活動は理系学生に多いという傾向があり、小・中学校時代の保護者とのかかわりもその後の志向に影響しているといえる（図省略、報告書 p.16～22）。

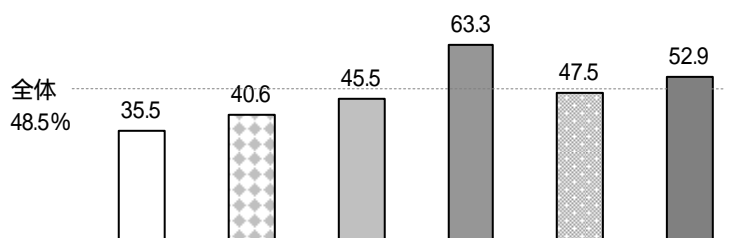
図1 - 2 小・中学校時代の体験（学部系統別）

理系学生に多い体験

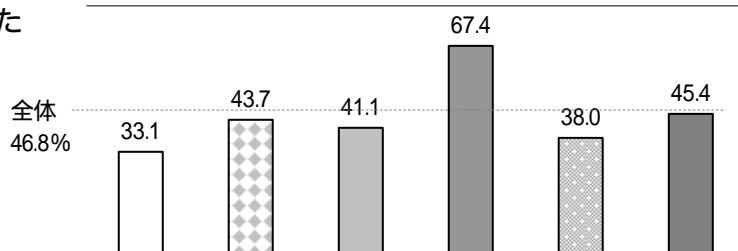
理科の実験が好きだった



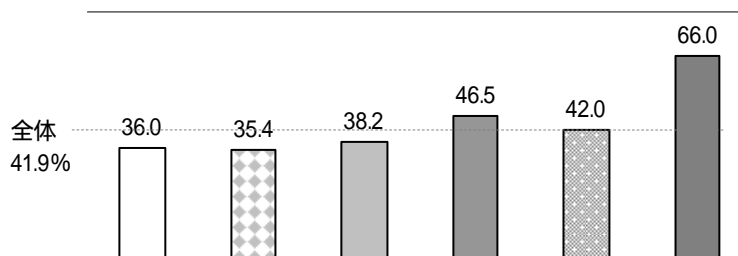
図形の勉強が好きだった



機械やものづくりに関心があった



自然や動物・植物の本を読んだ



人文科学系統
社会科学系統
教育学系統
理工学系統
医歯薬看護学系統
農水産学系統

* 数値は「とてもそう」と「ややそう」の合計 (%)。

* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

小・中学校時代の体験は大学の専門領域ごとにも異なる。

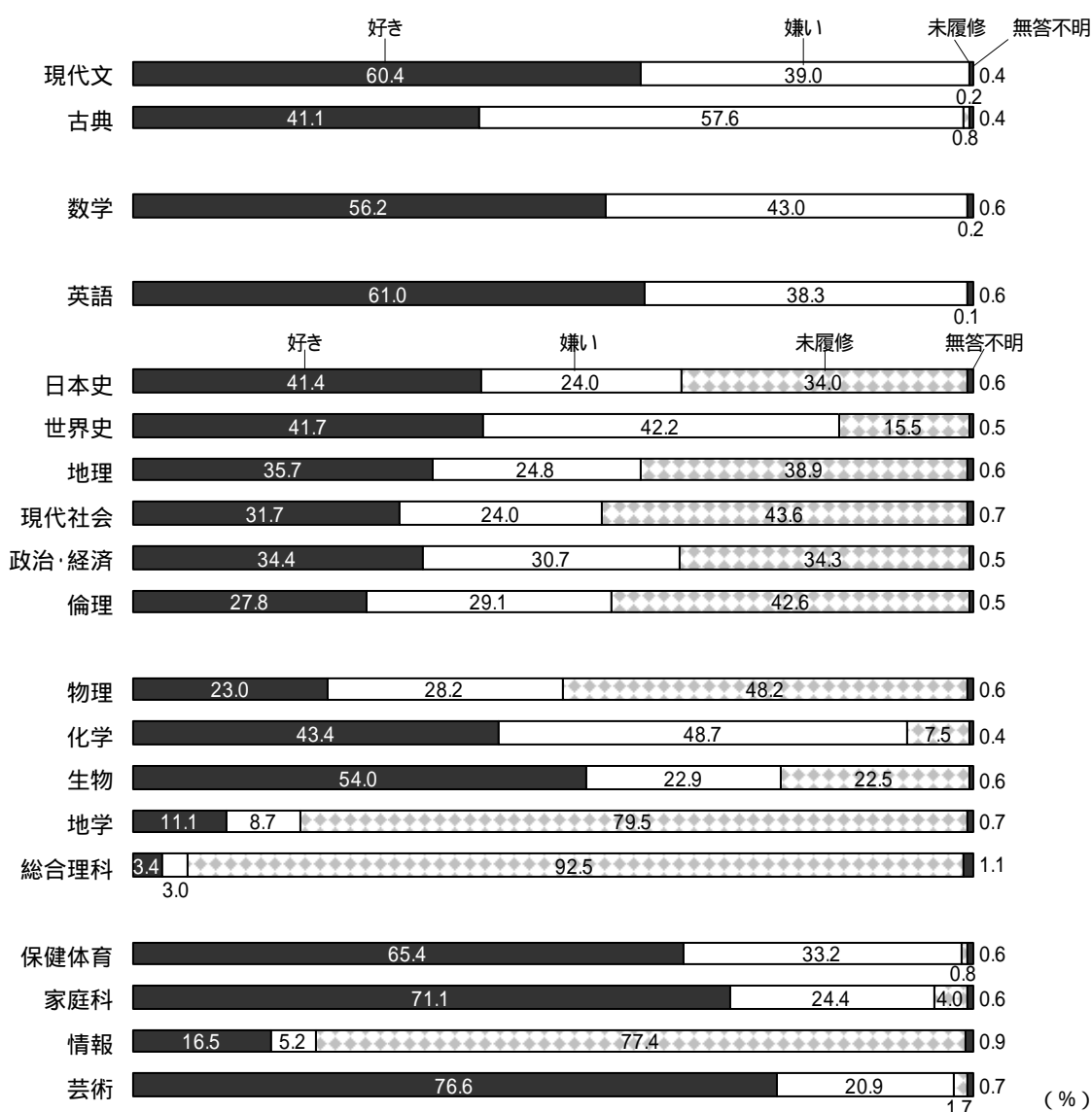
理工学系統に進学した学生は、「理科の実験が好きだった」「図形の勉強が好きだった」「機械やものづくりに関心があった」の各項目で「そう」（「とてもそう」と「ややそう」の合計）の比率が高い。小・中学校時代の体験や志向と大学での専門領域の選択には関連があることがわかる。

2. 教科の好き嫌いと大学入学試験

1. 教科の好き嫌い

詳細は、報告書 p.39～60 を参照

図2 - 1 高校時代の教科の好き嫌い 報告書 p.40、44～57

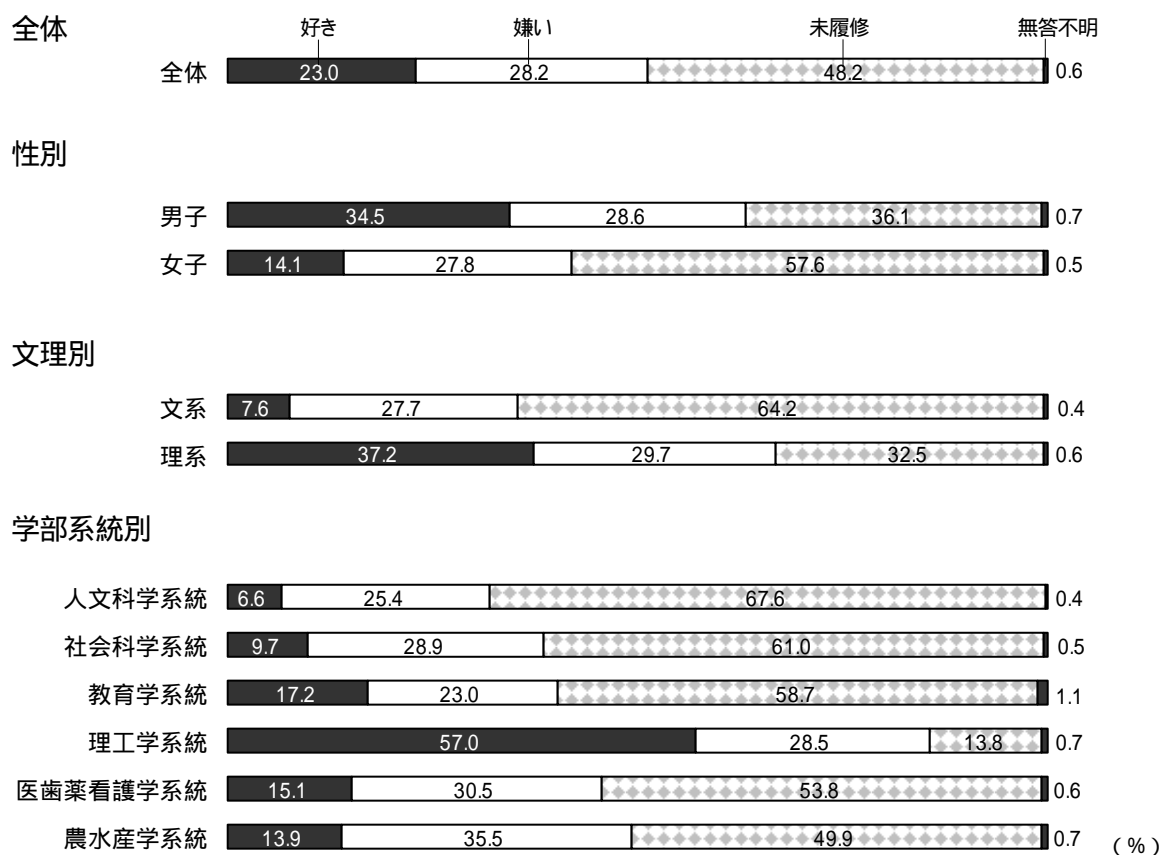


* 「好き」は「とても好き」+「やや好き」、「嫌い」は「とても嫌い」+「やや嫌い」、「未履修」は「履修していない」の比率を示す。

「物理」嫌いだった大学生が多い。

「現代文」「数学」「英語」はほぼ全員が履修しており、6割前後が「好き」と回答している。これに対して、理科や地歴・公民の履修率や「好き」の比率は、科目によって異なる。

図2 - 2 高校時代の「物理」の好き嫌い（全体、性別、文理別、学部系統別） 報告書 p.43、54



- * 「好き」は「とても好き」+「やや好き」、「嫌い」は「とても嫌い」+「やや嫌い」、「未履修」は「履修していない」の比率を示す。
- * 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。
- * 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

「物理」は理工学系統に進学した学生にのみ好まれている。

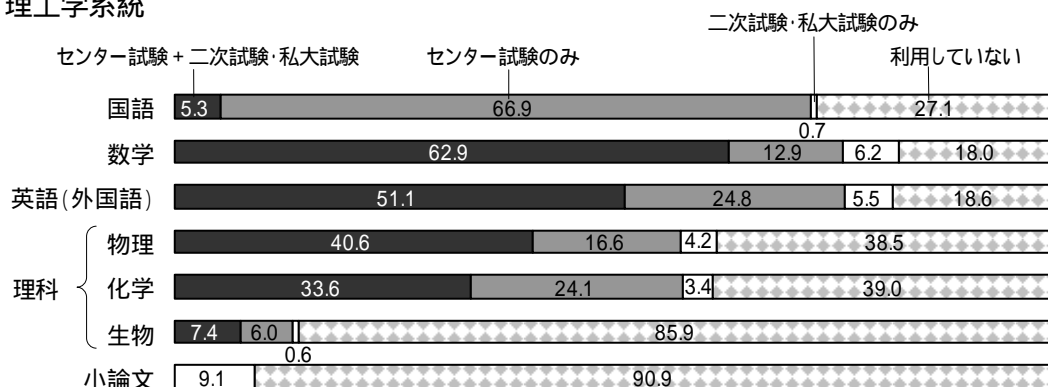
「物理」は、理工学系統に進学した学生にとくに好まれているのが特徴である。理系学生が多い医歯薬看護学系統や農水産学系統の学生でも、「未履修」もしくは「嫌い」という回答が多い。「物理」の好き嫌いは、同じ理系のなかでも、理工学系統に進学するかどうかを大きく左右する科目になっていることがわかる。

2. 大学入学試験

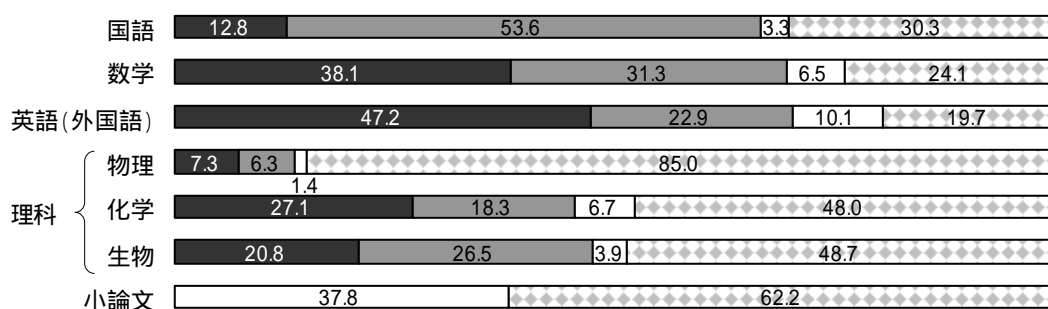
詳細は、報告書 p.93 ~ 109 を参照

図2 - 3 受験に用いた科目（理系学部系統） 報告書 p.104 ~ 109

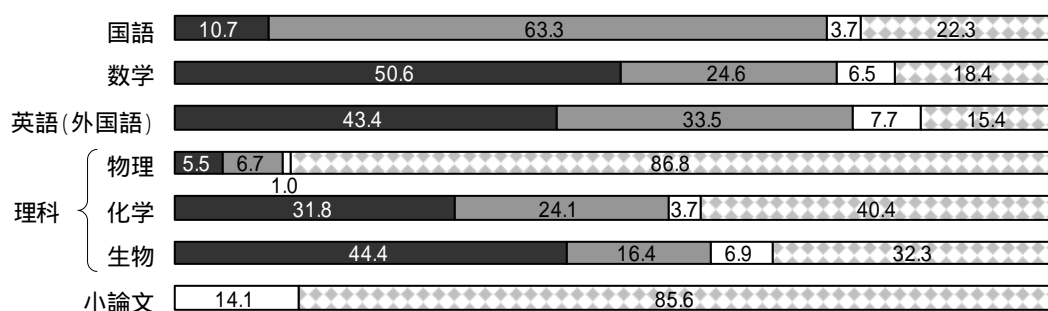
理工学系統



医歯薬看護学系統



農水産学系統



* 教科・科目の一部のみを掲載し、上記以外の教科・科目は図から省略した。

* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

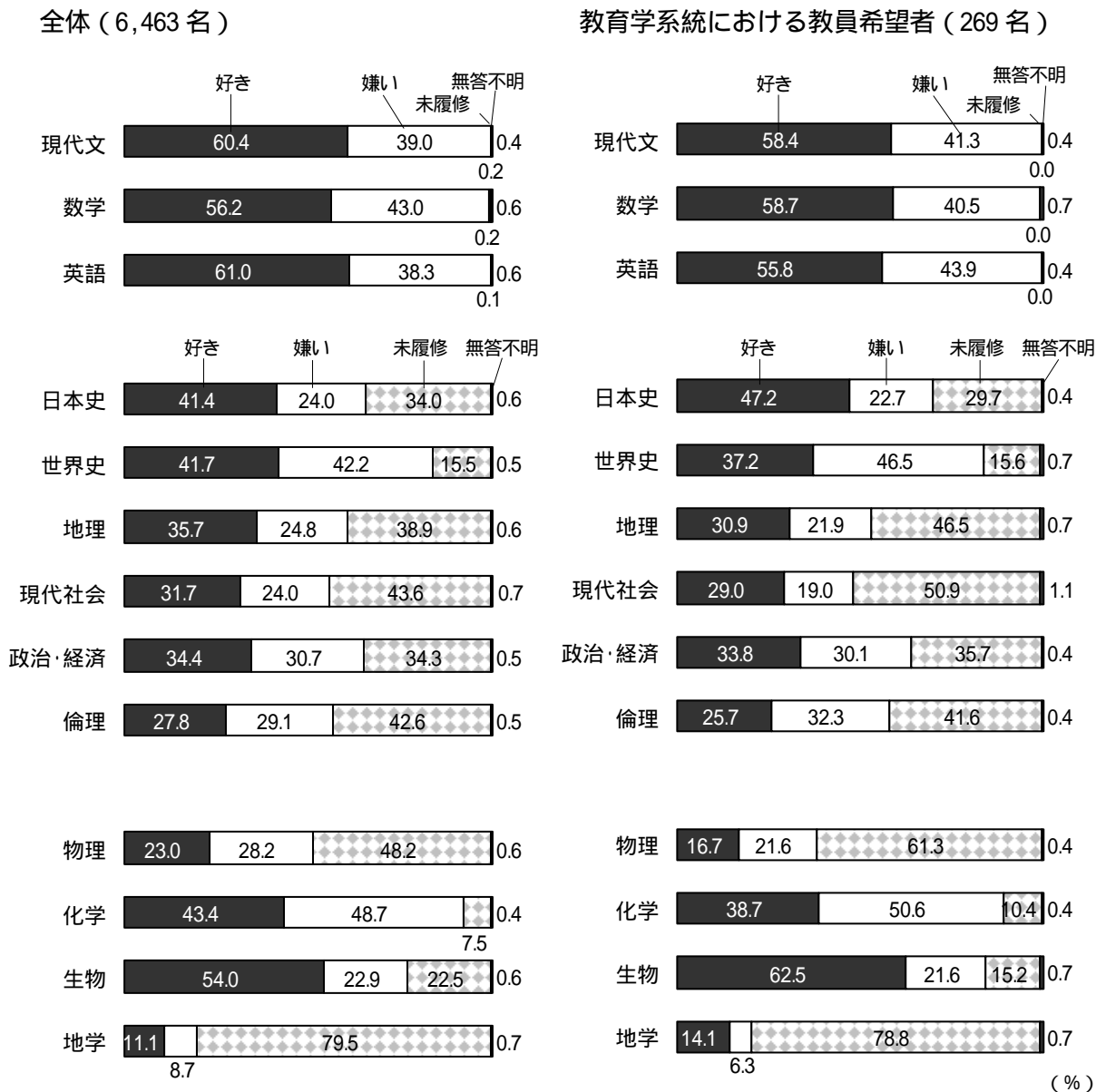
進学した学部系統により受験科目は大きく異なる。

理系の学部系統ごとに受験に用いた理科科目をみると、理工学系統は「物理」と「化学」を用い、医歯薬看護学系統と農水産学系統は「化学」と「生物」を用いている者が多い。ただし、理工学系統でも約4割が「物理」を受験に用いていない。

3. 教員志望者の教科の好き嫌い

詳細は、報告書 p.60～62 を参照

図2 - 4 高校時代の教科の好き嫌い（全体・教育学系統の教員希望者） 報告書 p.61



* 「好き」は「とても好き」+「やや好き」、「嫌い」は「とても嫌い」+「やや嫌い」、「未履修」は「履修していない」を示す。
 * 全体のなかには、教育学系統における教員希望者も含まれている。
 * 一部の教科・科目を図から省略した。

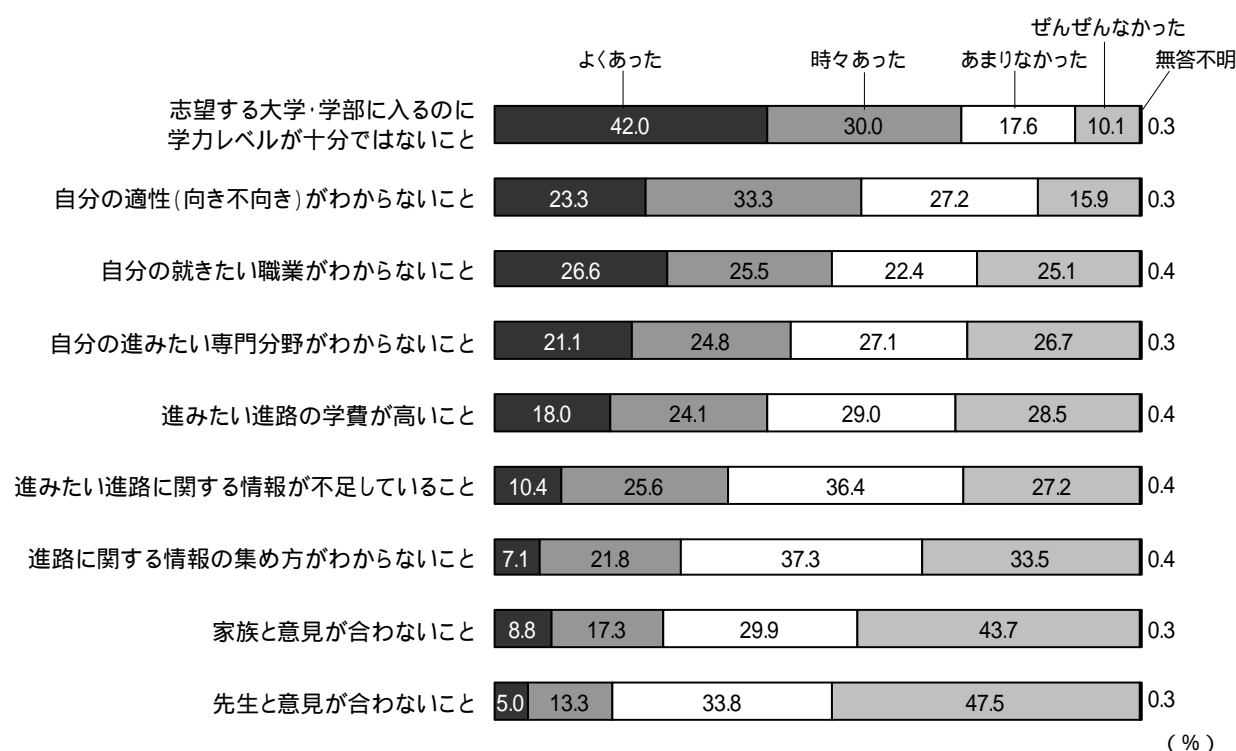
教員の「卵」に物理嫌が多い。
 教育学系統における教員志望者は、全体の数値と比べて「物理」の「未履修」が多い。教員に「物理」嫌が多い可能性が示唆される。

3 . 進路選択の不適合

1 . 進路を選択するときの悩み

詳細は、報告書 p.76～80 を参照

図3 - 1 進路を選択するときの悩み 報告書 p.77



半数以上が高校時代に「自分の適性」「就きたい職業」がわからなかった。

高校時代に進路を選択するとき、どのようなことに悩んだかをたずねたところ、「志望する大学・学部に入るのに学力レベルが十分ではないこと」が72.0%（「よくあった」と「時々あった」の合計）でもっとも多かった。さらに、「自分の適性（向き不向き）がわからないこと」「自分の就きたい職業がわからないこと」といった自己理解や将来の職業についての悩みを持つ者も、半数を超えていた。

文系と理系の違いに注目すると、文系学生には「自分の就きたい職業がわからないこと」「自分の進みたい専門分野がわからないこと」といった先の将来がわからないという悩みが多い傾向がうかがえる（図省略、報告書 p.79 参照）。こうした悩みについて学部系統ごとに見ると、社会科学系統や人文科学系統の比率が高く、教育学系統や医歯薬看護学系統は低い（図省略、報告書 p.80 参照）。

4 . 大学の教育に対する意識・満足度

1 . 大学への進学理由

詳細は、報告書 p.112～121 を参照

図4 - 1 大学への進学理由 報告書 p.113

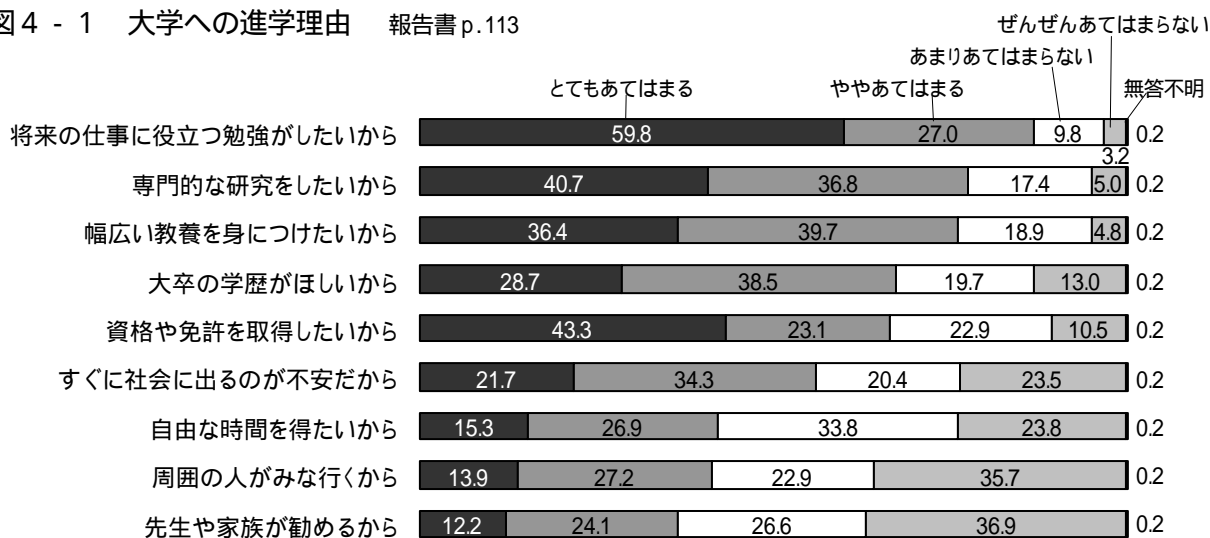
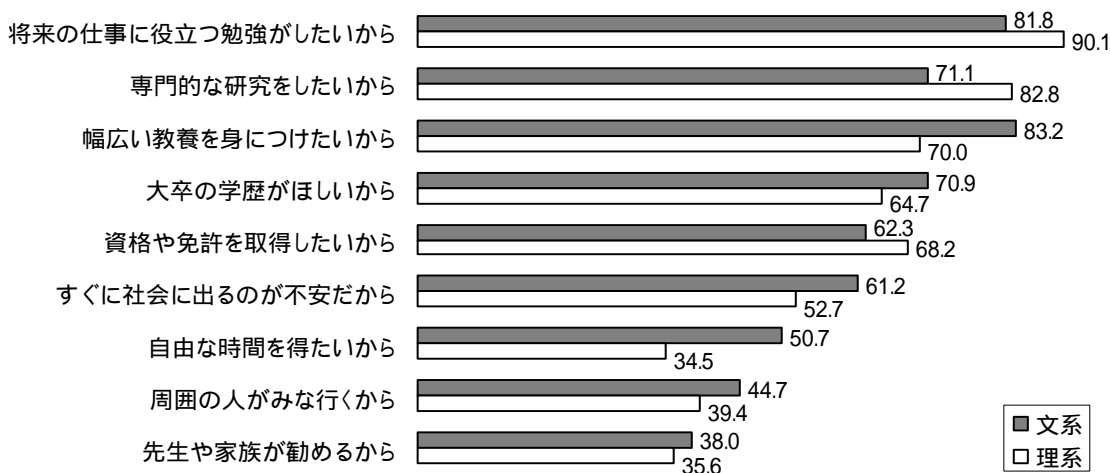


図4 - 2 大学への進学理由（文理別） 報告書 p.115



* 数値は「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計 (%)。

* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答したものは図から省略した。

「将来の仕事に役立つ勉強がしたい」が大学進学理由の第一位。

大学への進学理由をたずねたところ、全体では「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」がトップであった。文理別にみると、文系学生に多いのは、「幅広い教養を身につけたいから」「自由な時間を得たいから」でモラトリアム的な傾向がうかがえる。理系学生でとくに多いのは、「専門的な研究をしたいから」「将来の仕事に役立つ勉強をしたいから」、さらには「資格や免許を取得したいから」などであり、学問重視と資格取得志向が強くみられる。

2. 大学や学部・学科選択で重視したこと

詳細は、報告書 p.122～129 を参照

表4 - 1 大学や学部・学科選択で重視したこと（学部系統別） 報告書 p.127 (%)

	全体	人文科学系統	社会科学系統	教育学系統	理工学系統	医歯薬看護学系統	農水産学系統
専攻したい学問分野がある	80.5	84.6	<u>64.3</u>	82.6	80.1	84.4	90.3
入試科目・選抜方法があっている	60.7	61.6	61.9	60.3	59.6	60.3	63.3
入試の難易度があっている	59.4	57.1	63.2	60.3	63.9	57.7	57.1
自宅から通える	43.7	51.1	47.0	47.5	39.5	37.7	33.7
資格・免許がとれる	41.8	38.7	18.9	79.9	22.5	91.1	26.3
校風やキャンパスの雰囲気がよい	37.3	47.8	44.0	33.5	27.1	30.8	39.0
伝統や知名度がある	37.1	40.9	53.3	32.1	36.1	22.4	32.8
授業料が安い	33.9	25.3	26.1	53.8	38.2	38.1	42.2
施設・設備がよい	30.9	31.1	33.8	9.8	29.2	37.0	29.3
総合大学である	25.4	21.4	30.9	19.2	29.7	25.2	26.1
就職のための支援が充実している	18.2	19.8	22.5	17.4	16.2	19.6	8.9
親元を離れられる	17.1	16.5	15.9	14.1	20.5	13.3	24.1
大都市にある	14.9	16.4	23.7	8.5	14.6	9.2	11.4
大学院が設置されている	11.7	7.9	5.2	4.9	22.5	11.1	16.1
有名な教員、優秀な教員がいる	9.1	9.8	8.6	6.9	8.3	8.3	8.4
自分の入りたいクラブ・サークルがある	7.4	8.2	7.3	10.7	7.3	4.0	7.7
奨学金制度が充実している	4.8	4.9	5.6	4.7	4.4	5.4	3.2

* 複数回答。

* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は表から省略した。

* ○ は全体の平均値よりも5ポイント以上、◎ は10ポイント以上高いものを示す。

* 一重下線は全体の平均値よりも5ポイント以上、二重下線は10ポイント以上低いものを示す。

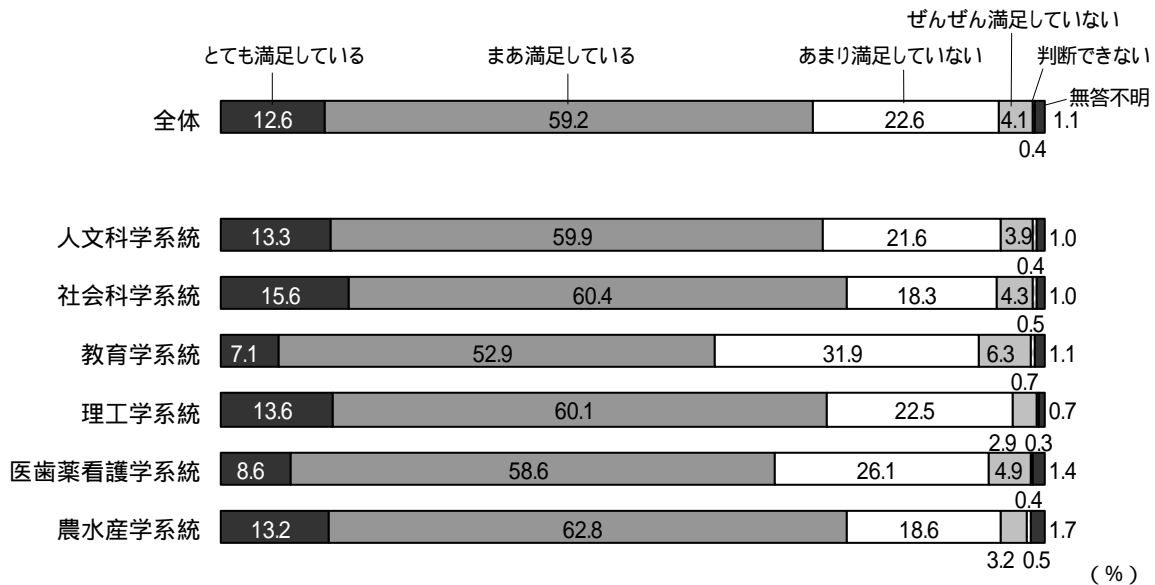
大学・学部選択の基準は学部系統により大きく異なる。

大学や学部・学科選択で重視したことをみると、全体では「専攻したい学問分野がある」が一番高く、次いで、「入試科目・選抜方法があっている」「入試の難易度があっている」など、大学入試を考慮したという回答が続く。さらに、学部系統別にみると、人文科学系統は「自宅から通える」「校風やキャンパスの雰囲気がよい」、社会科学系統は「伝統や知名度がある」「大都市である」といった大学のイメージやキャンパスライフを重視する傾向がみられる。教育学系統と医歯薬看護学系統は「資格・免許がとれる」を選択する比率が高い。理工学系統は、「大学院が設置されている」が他の学部系統と比べて高く、「校風やキャンパスの雰囲気がよい」は低い結果となった。農水産学系統は、「専攻したい学問分野がある」が9割を超えている。

3. 大学や学部・学科についての満足度

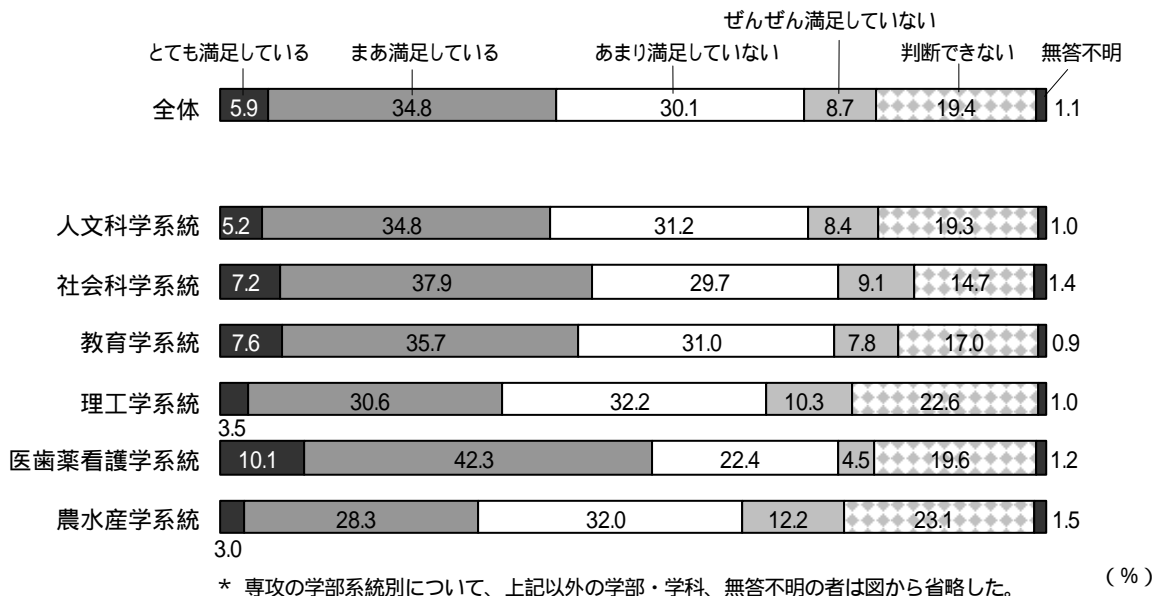
詳細は、報告書 p.130～154 を参照

図4 - 3 施設・設備についての総合満足度（全体、学部系統別） 報告書 p.131、136



* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

図4 - 4 進路支援の体制についての総合満足度（全体、学部系統別） 報告書 p.131、137

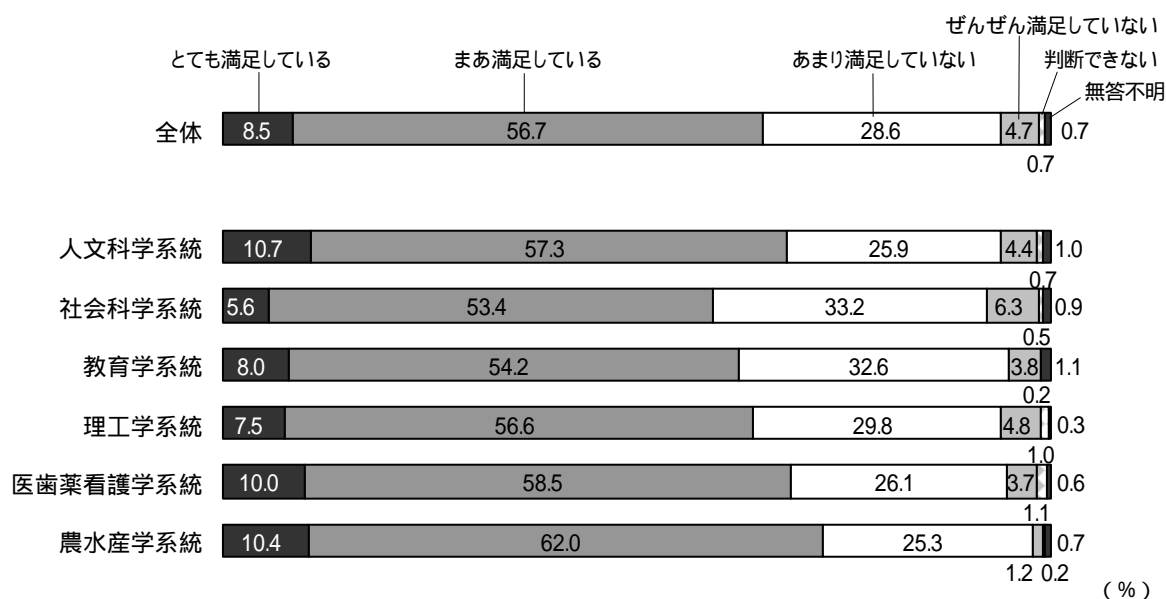


* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

大学の進路支援の体制についての満足度が低い。

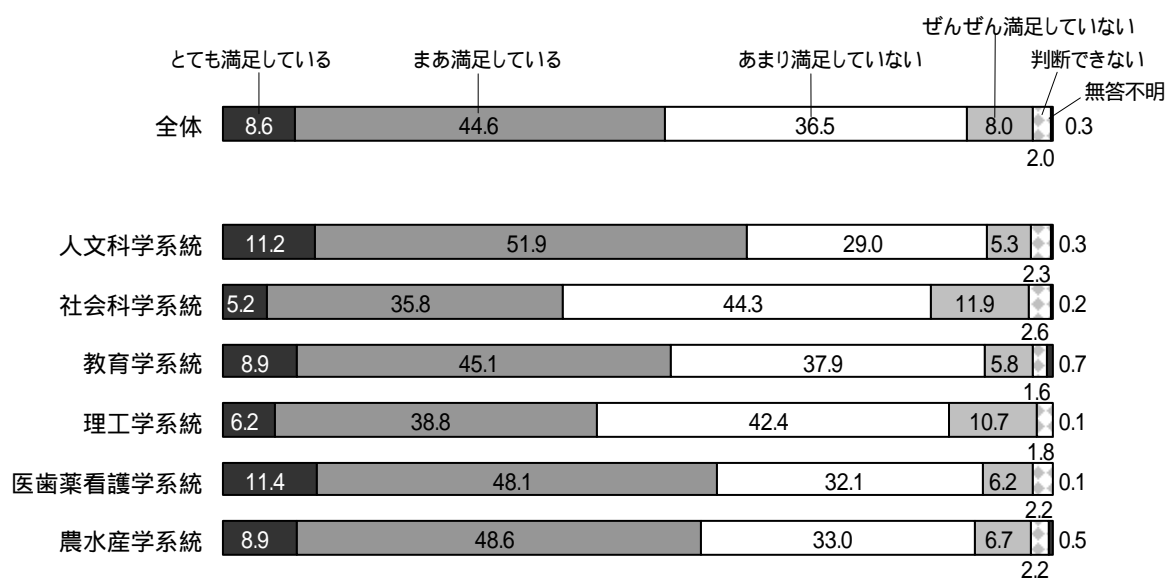
施設・設備について「満足している」(とても+まあ)という回答は71.8%と総じて高いが、教育学系統でやや低い傾向が表れている。進路支援について「満足している」のは40.7%で、関連する5項目中でもっとも低く、理工学系統と農水産学系統はとくに低かった。

図4 - 5 授業・教育システムについての総合満足度（全体、学部系統別） 報告書 p.133、139



* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

図4 - 6 教員についての総合満足度（全体、学部系統別） 報告書 p.133、140



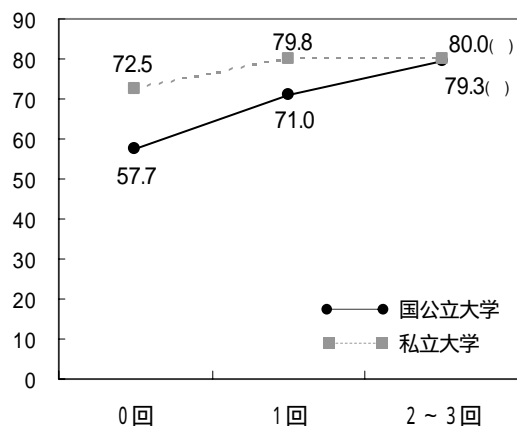
* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

教員についての満足度は社会科学系統、理工学系統で低い。

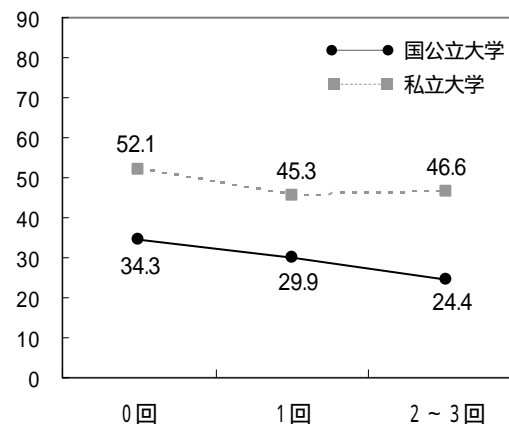
授業・教育システムについて「満足している」(とても+まあ)という回答は 65.2%であり、3人に2人は満足しているようだ。「満足している」が6割を超える学部系統が多いが、社会科学系統だけが59.0%で6割を下回っている。教員について「満足している」のは53.2%で、半数を上回っている。しかし、社会科学系統は41.0%、理工学系統は45.0%と満足度が低い。

図4 - 7 大学や学部・学科についての満足度（設置元別・COE採択回数別） 報告書 p.148 ~ 152

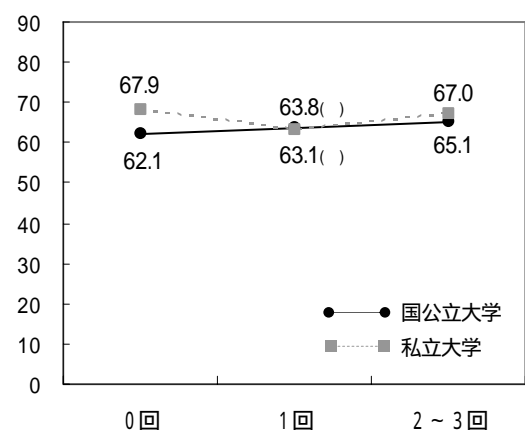
施設・設備についての総合満足度



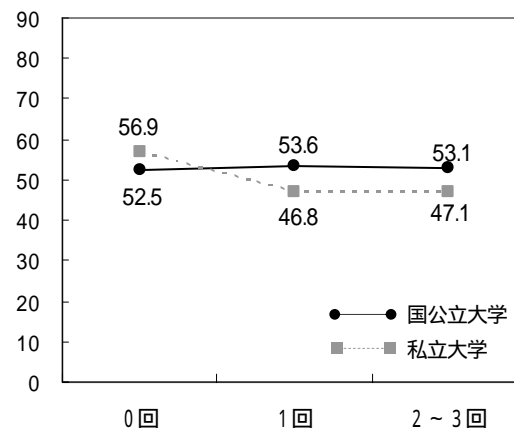
進路支援の体制についての総合満足度



授業・教育システムについての総合満足度



教員についての総合満足度



* 数値は「とても満足している」と「まあ満足している」の合計(%)。

* COE採択回数は、回答者が所属する大学の過去3年(平成14年~16年)のCOE採択回数を示す。

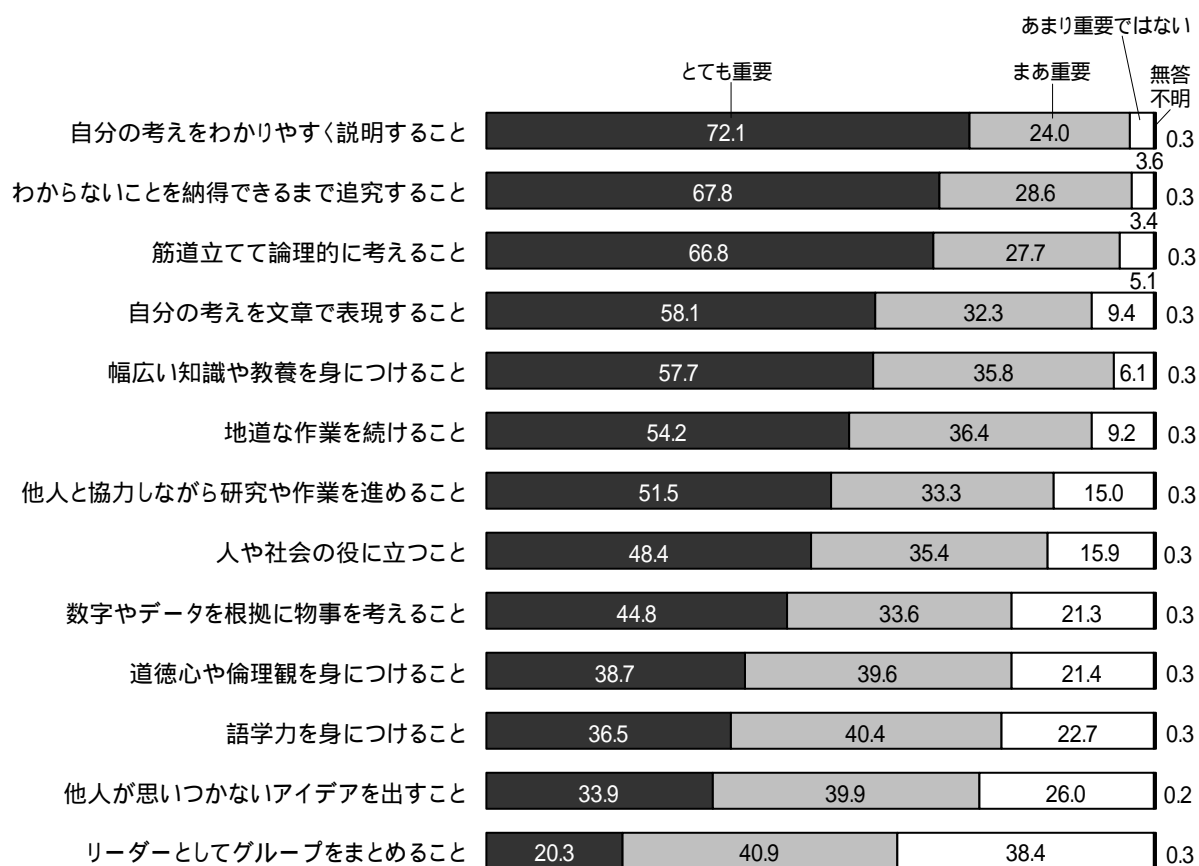
施設・設備や進路支援の体制についての総合満足度が国公立大学で低い。

施設・設備についての総合満足度をみると、COE採択回数が少ない国公立大学で満足度が低い。こうした大学の施設・設備の整備が進んでいない可能性を示唆する。また、進路支援についての総合満足度は、COE採択回数を問わず私立大学よりも国公立大学の満足度が低い。

4 専門領域の学びに必要な能力や態度

詳細は、報告書 p.158～179 を参照

図4 - 8 専門領域に重要な能力・態度 報告書 p.158



専門領域の学びに必要な能力・態度の第一位は「自分の考えをわかりやすく説明すること」。専門領域に重要な能力・態度をたずねたところ、「とても重要」という回答は「自分の考えをわかりやすく説明すること」がトップであった。多くの大学生が、表現する力や説明する力を重要と考えていることがわかる。続いて、「わからないことを納得できるまで追究すること」という学問的なねばり強さ、「筋道を立てて論理的に考えること」という論理的思考力が上位になった。

表4 - 2 専門領域に重要な能力・態度（学部系統別） 報告書 p.163

（％）

	全体	人文科学系統	社会科学系統	教育学系統	理工学系統	医歯薬看護学系統	農水産学系統
自分の考えをわかりやすく説明すること	72.1	75.7	70.5	82.4	69.3	71.0	70.0
わからないことを納得できるまで追究すること	67.8	58.4	57.4	58.7	79.6	74.2	78.4
筋道立てて論理的に考えること	66.8	60.9	72.2	61.8	73.7	64.8	70.5
自分の考えを文章で表現すること	58.1	76.0	66.8	59.6	49.7	41.4	56.1
幅広い知識や教養を身につけること	57.7	65.2	61.0	70.8	43.1	65.9	48.4
地道な作業を続けること	54.2	52.1	38.4	48.4	63.9	51.2	72.5
他人と協力しながら研究や作業を進めること	51.5	36.3	30.2	54.2	57.4	79.1	62.3
人や社会の役に立つこと	48.4	36.6	48.6	65.2	36.4	84.6	38.0
数字やデータを根拠に物事を考えること	44.8	20.8	35.9	28.6	68.1	52.7	64.0
道徳心や倫理観を身につけること	38.7	33.9	34.6	64.3	24.2	72.1	28.8
語学力を身につけること	36.5	54.0	36.6	27.7	36.2	20.0	37.2
他人が思いつかないアイデアを出すこと	33.9	24.5	25.9	33.5	53.3	16.2	38.7
リーダーとしてグループをまとめること	20.3	13.8	21.8	46.7	15.0	26.8	10.7

* 数値は「とても重要」と回答した比率。

* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は表から省略した。

* ○ は全体の平均値よりも5ポイント以上、◎ は10ポイント以上高いものを示す。

* 一重下線は全体の平均値よりも5ポイント以上、二重下線は10ポイント以上低いものを示す。

専門領域の学びに重要な能力や態度は学部系統により大きく異なる。

専門領域に重要な能力・態度についてたずねた結果を学部系統別にみたと、何を重要と考えるかが学部系統によって異なる様子が明らかになった。人文科学系統は、「自分の考えを文章で表現すること」「語学力を身につけること」など文章表現力や語学力を重視する一方で、「数字やデータを根拠に物事を考えること」を選択する比率は低い。教育学系統は「自分の考えをわかりやすく説明すること」「幅広い知識や教養を身につけること」「人や社会の役に立つこと」「道徳心や倫理観を身につけること」「リーダーとしてグループをまとめること」など、教員として必要な資質や能力を重視している。理工学系統や農水産学系統は、「わからないことを納得できるまで追究すること」「地道な作業を続けること」「数字やデータを根拠に物事を考えること」などの比率が高いが、「人や社会の役に立つこと」「道徳心や倫理観を身につけること」といった公共心や道徳心を重視する比率は低い。医歯薬看護学系統は、「他人と協力しながら研究や作業を進めること」「人や社会の役に立つこと」「道徳心や倫理観を身につけること」などを選択する比率が、他の学部系統に比べて高い。

5 . 大学生の進路選択過程

1 . 大学生の進路選択過程

詳細は、報告書 p.202～231 を参照

図5 - 1 文系・理系を意識した時期 報告書 p.203

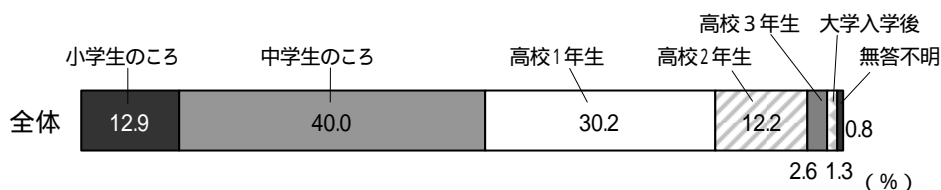


図5 - 2 大学での専攻分野を意識した時期 報告書 p.211

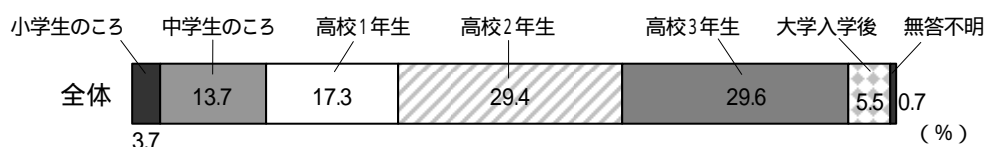


図5 - 3 進学する大学を意識した時期 報告書 p.217

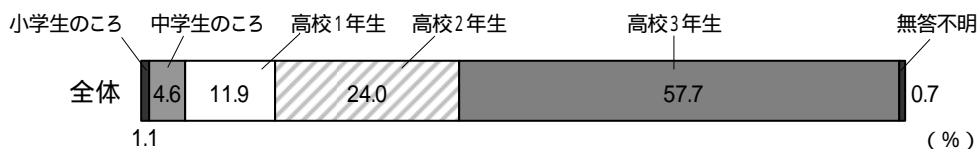
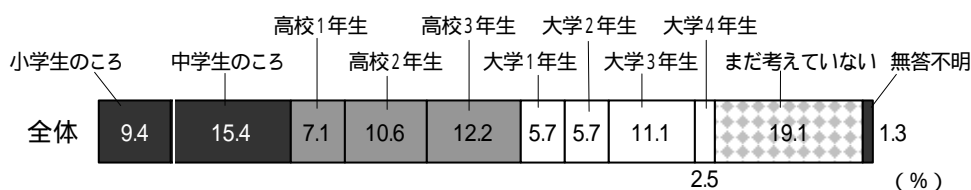


図5 - 4 職業を意識した時期 報告書 p.225



大学生の約半数が小・中学校時代に文系・理系を意識している。

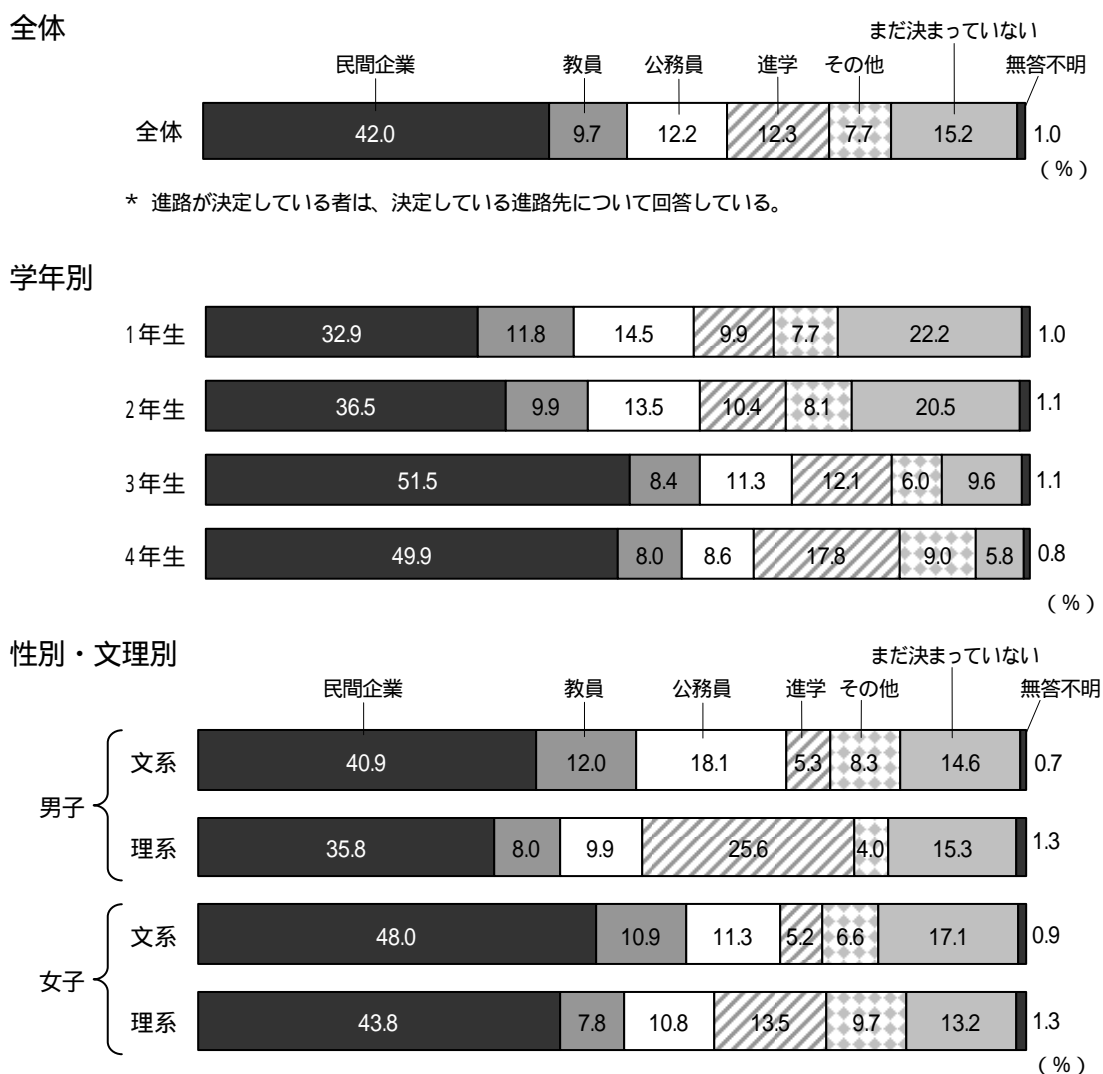
文系・理系を意識した時期は「小学生のころ」と「中学生のころ」をあわせると52.9%で、過半数が高校入学までに意識している。この比率は、大学での専攻分野を意識した時期では17.4%、進学する大学を意識した時期では5.7%と少なくなるが、職業を意識した時期では24.8%と4人に1人程度となる。大学での専攻分野を意識した時期と進学する大学を意識した時期は、「高校2年生」「高校3年生」の比率が高い。また、職業を意識した時期は、回答にちらばりがみられる。

6 . 大学卒業後の進路希望

1 . 希望する進路

詳細は、報告書 p.248～264 を参照

図6 - 1 希望する進路 報告書 p.249



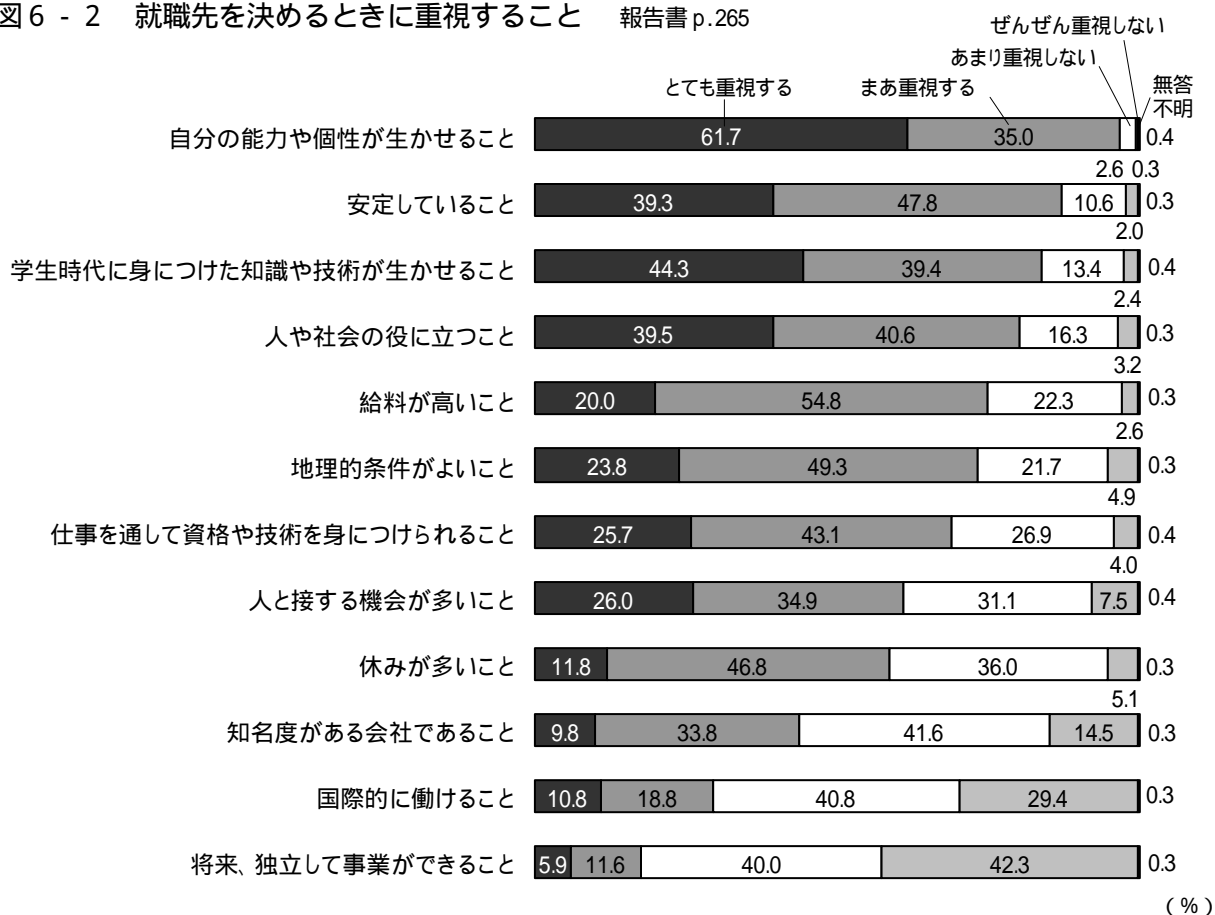
希望する進路は性や文理によって異なる。

今回の調査対象者が希望している進路は、「民間企業」が4割、「教員」「公務員」「進学」がそれぞれ1割前後、「その他」が1割弱、「まだ決まっていない」が1割5分であった。学年が上がるとともに「民間企業」「進学」の比率が高まり、「公務員」「まだ決まっていない」が低くなる。

2. 就職先を決めるときに重視すること

詳細は、報告書 p.265～279 を参照

図6 - 2 就職先を決めるときに重視すること 報告書 p.265



ほとんどの大学生が就職先を決めるとき「自分の能力や個性が活かせること」を重視すると回答。就職先を決めるときに重視することをたずねたところ、「自分の能力や個性が活かせること」が96.7%（「とても重視する」と「まあ重視する」の合計）でトップであった。「学生時代に身につけた知識や技術が活かせること」（83.7%）も上位であり、自分の力が発揮できることを重視していることがわかる。また、「安定していること」（87.1%）や「給料が高いこと」（74.8%）といった経済的な条件、「人や社会の役に立つこと」（80.1%）といった社会貢献も重視する比率が高い。その一方で、「将来、独立して事業ができること」「国際的に働けること」といった独立志向や国際志向は、「重視する」という回答が少ない。

3. 職業に関する意識

詳細は、報告書 p.280～289 を参照

図6 - 3 職業に関する意識 報告書 p.281

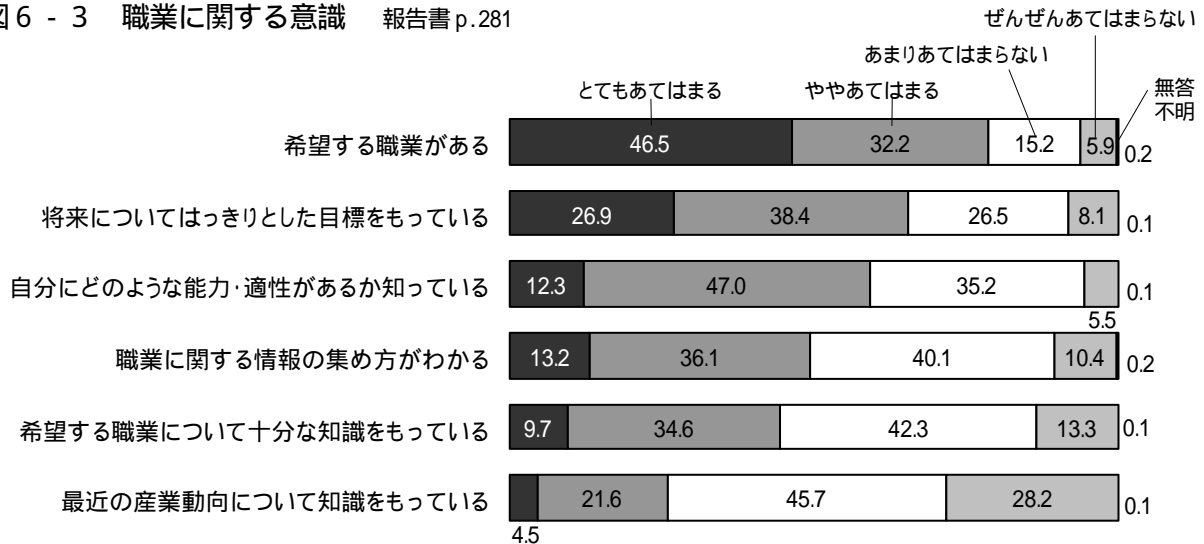


表6 - 1 職業に関する意識（文理別・性別） 報告書 p.282

(%)

	全体	男子		女子	
		文系	理系	文系	理系
希望する職業がある	78.7	79.7	74.5	75.5	83.3
将来についてはっきりとした目標をもっている	65.3	64.7	62.5	60.6	69.5
自分にどのような能力・適性があるか知っている	59.3	62.9	60.1	58.5	55.2
職業に関する情報の集め方がわかる	49.3	52.7	42.9	50.5	50.3
希望する職業について十分な知識をもっている	44.3	46.7	37.4	42.1	47.9
最近の産業動向について知識をもっている	26.1	39.3	31.4	20.6	16.3

* 数値は「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計。

* 「文系と理系の中間」「その他」は表から省略した。

* < > は5ポイント以上の差があったもの。

* ○ は文系男子、理系男子、文系女子、理系女子のなかでの最高値、下線は最低値を示す。

「希望する職業について十分な知識をもっている」のは44.3%。

職業に関する意識をたずねたところ、全体で「あてはまる」(とても+やや)という回答が多かったのは、「希望する職業がある」(78.7%)、「将来についてはっきりとした目標をもっている」(65.3%)、「自分にどのような能力・適性があるか知っている」(59.3%)であった。

性別に文系 理系の差をみると、男子の文系学生に、「職業に関する情報の集め方がわかる」「最近の産業動向について知識をもっている」などの比率が高く、一方で男子の理系学生には低かった。また、女子の理系学生は将来の目標や希望する職業についての意識は高いようだ。

表 6 - 2 職業に関する意識(学部系統別) 報告書 p.283

(%)

	全体	人文科学系統	社会科学系統	教育学系統	理工学系統	医歯薬看護学系統	農水産学系統
希望する職業がある	79.0	<u>73.3</u>	75.9	(87.6)	<u>72.5</u>	(96.1)	76.9
将来についてはっきりとした目標をもっている	65.1	<u>58.3</u>	59.4	(77.4)	58.9	(89.0)	<u>54.9</u>
自分にどのような能力・適性があるか知っている	58.9	58.0	57.4	(69.7)	54.7	(66.9)	<u>45.7</u>
職業に関する情報の集め方がわかる	50.3	48.1	52.2	(54.5)	42.6	(63.7)	<u>43.5</u>
希望する職業について十分な知識をもっている	44.9	<u>38.2</u>	43.5	(58.7)	<u>32.6</u>	(74.1)	<u>31.2</u>
最近の産業動向について知識をもっている	26.0	22.1	(42.7)	<u>19.3</u>	26.6	<u>20.0</u>	<u>16.4</u>

* 数値は「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計。

* 大学卒業後の希望進路を「進学」と回答したものは除外した(「全体」の数値も同様)。

* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は表から省略した。

* ○は全体の平均値よりも5ポイント以上、◎は10ポイント以上高いものを示す。

* 一重下線は全体の平均値よりも5ポイント以上、二重下線は10ポイント以上低いものを示す。

理工学系統と農水産学系統は職業に対するイメージが明確ではない。

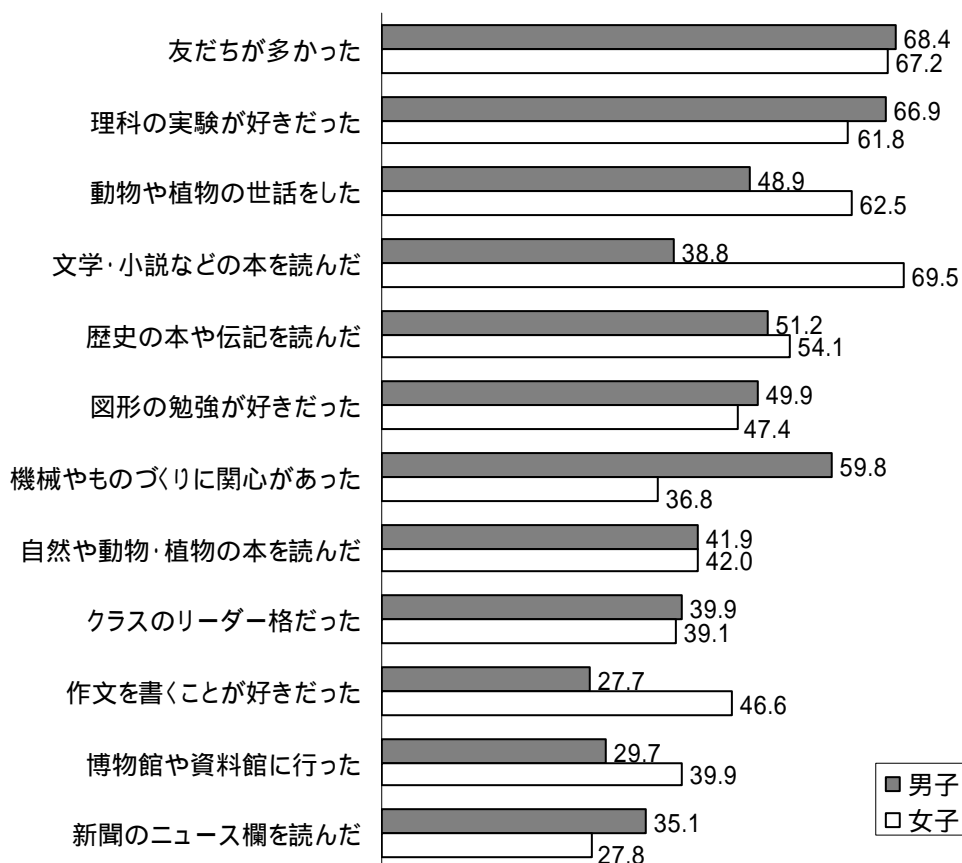
大学卒業後の進路希望について「進学」と回答したものを除外して、職業に関する意識を学部系統ごとにみた。「あてはまる」(とても+やや)という回答は、「希望する職業がある」「将来についてはっきりとした目標をもっている」「自分にどのような能力・適性があるか知っている」「職業に関する情報の集め方がわかる」「希望する職業について十分な知識をもっている」の5項目で、教育学系統と医歯薬看護学系統の比率が高いことが示された。一方で、理工学系統や農水産学系統の学生は、進学希望者を除いても、このような意識が低い傾向があり、とくに女子学生の比率が低い(一部図省略、報告書 p.318)。この2つの系統は女子が少ないため、職業に対するイメージがもちにくい可能性を示唆する。また、「最近の産業動向について知識をもっている」は、専門領域の履修内容を反映してか、社会科学系統の学生の比率が高かった。

7. 女子の理工学系統への進学

1. 小・中学校時代の活動や体験

詳細は、報告書 p.294～301 を参照

図7 - 1 小・中学校時代の体験 報告書 p.24



* 数値は「とてもそう」と「ややそう」の合計 (%)。

小・中学校時代の体験は性により異なる。

小・中学校時代の体験には、性による差がみられる項目がある。肯定率（「とてもそう」と「ややそう」の合計）は、「機械やものづくりに関心があった」「新聞のニュース欄を読んだ」などは男子に多く、「動物や植物の世話をした」「文学・小説などの本を読んだ」「作文を書くことが好きだった」「博物館や資料館に行った」などは女子に多い。

図7-2 小・中学校時代の体験（性別） 報告書 p.299

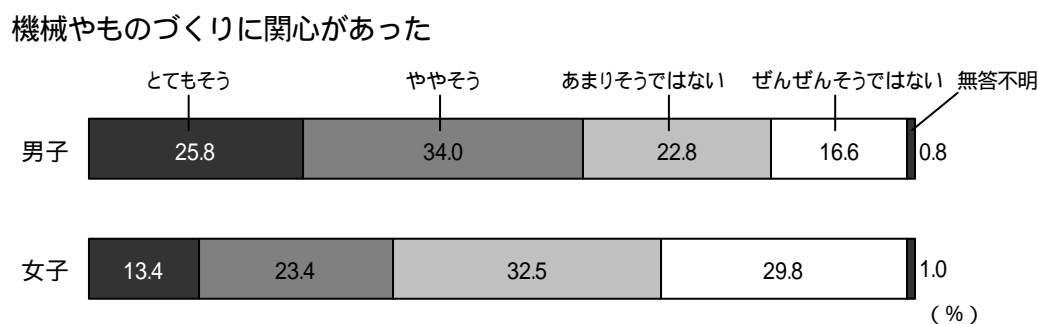
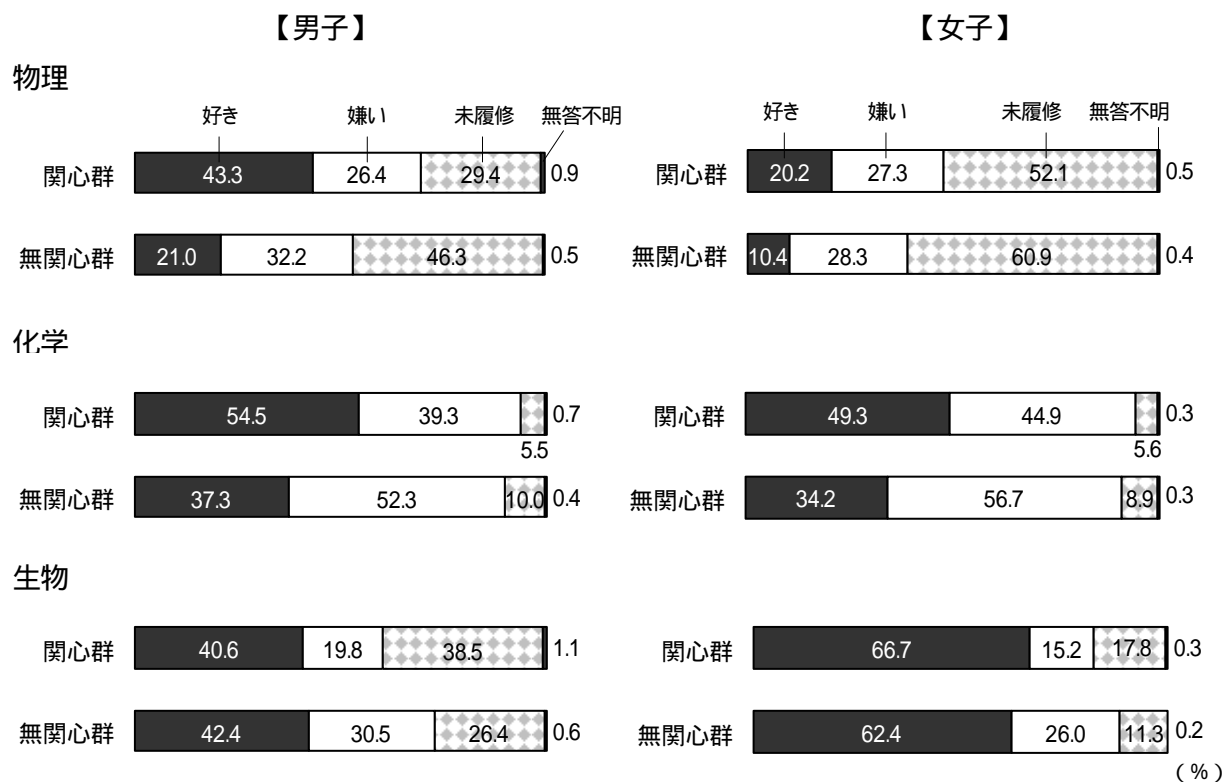


図7-3 高校時代の教科の好き嫌い（性別、機械等への関心別） 報告書 p.299



* 「機械やものづくりに関心があった」の項目に、「とてもそう」「ややそう」と回答した者を「関心群」、「ぜんぜんそうではない」「あまりそうではない」と回答した者を「無関心群」とした。

* 教科の好き嫌いについて、「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計、「未履修」は「履修していなかった」の数値を示す。

女子は機械やものづくりに関心があっても「物理」を履修しない。

「機械やものづくりに関心があった」という項目に、「そう」（とても＋やや）と回答したものを「関心群」、「そうではない」（ぜんぜん＋やや）と回答したものを「無関心群」として、理科の科目の好き嫌いや履修状況をみた。「物理」に注目すると、男子は、「無関心群」でも半数以上が「物理」を履修しているのに対して、女子はもともと「関心群」が男子よりも少ないうえに、たとえ関心をもっている「未履修」の比率が高い。

2. 高校時代の進路選択過程

詳細は、報告書 p.302 ~ 309 を参照

図7 - 4 高校時代のコース（性別） 報告書 p.303

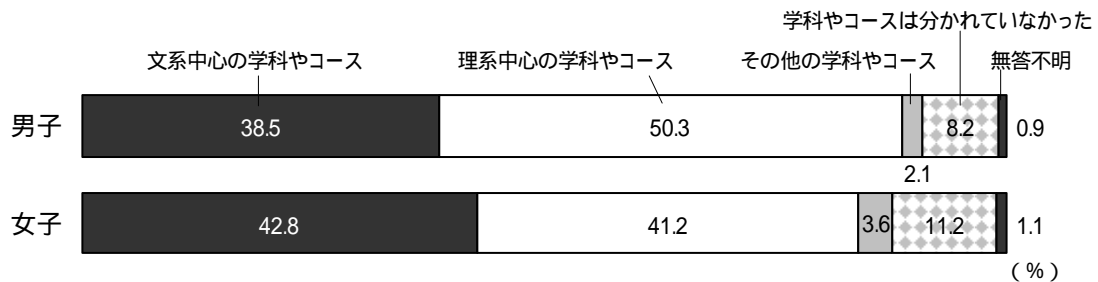
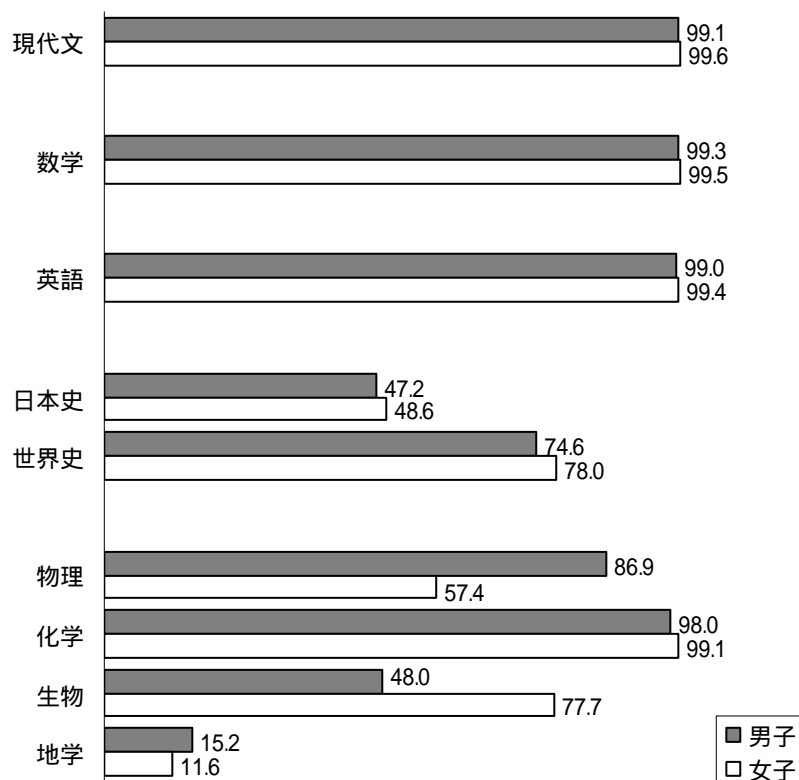


図7 - 5 教科の履修率（性別、「理系中心の学科やコース」在籍者のみ） 報告書 p.303

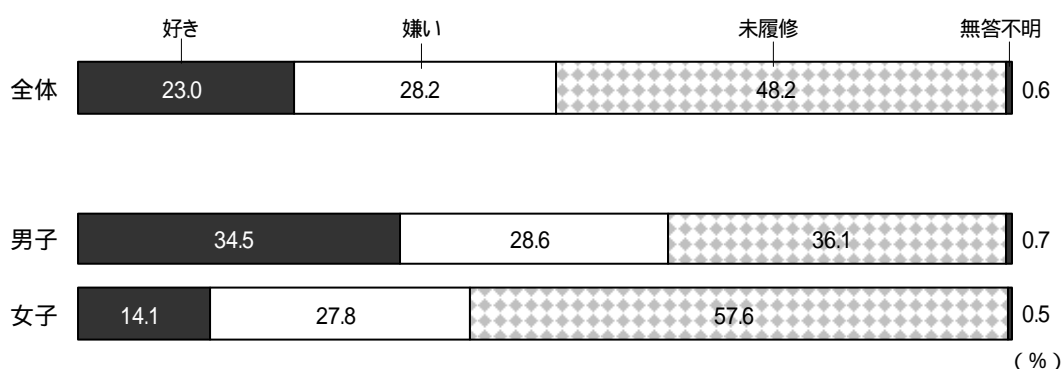


- * 数値は、高校時代の教科の好き嫌いについての質問に対する回答から「履修していなかった」「無答不明」の比率を除いたもの。
- * 結果は、高校時代に選択していた学科・コースについて「理系中心の学科やコース」と回答した者の数値のみを示している。
- * 図は一部の教科・科目を省略している。

女子は理系コースに在籍しても、「物理」よりも「生物」を選択する。

高校時代に「理系中心の学科やコース」を選択した者は、男子 50.3% に対して女子は 41.2% と少ないが、差は 10 ポイント未満である。しかし、同じ「理系中心の学科やコース」に在籍していても、理科の履修パターンは性により異なる。男子は「物理」、女子は「生物」の履修率が高い。

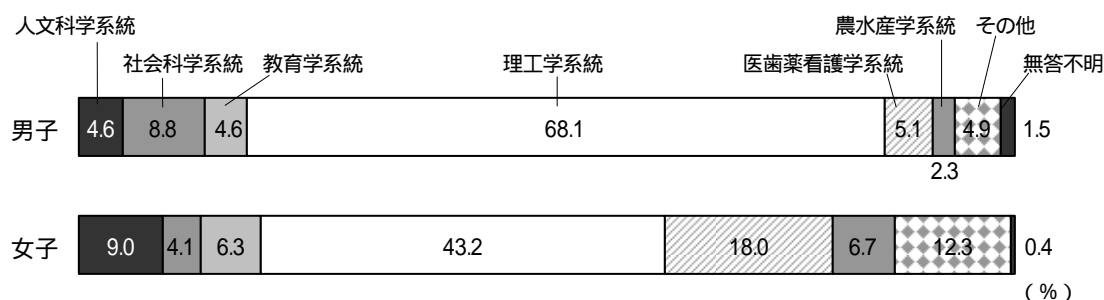
図7 - 6 高校時代の「物理」の好き嫌い（全体、性別） 報告書 p.307



* 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。

* 「未履修」は「履修していなかった」の数値。

図7 - 7 在籍する学部系統（性別、物理が「好き」な者のみ） 報告書 p.307



* 結果は、高校時代の「物理」の好き嫌いについて、「とても好き」「やや好き」と回答した者の数値のみを示している。

「物理」好きでも女子は男子より理工学系統進学者が少ない。

高校時代に「物理」を履修していた比率や「好き」と回答した比率は、性により異なる。「好き」と回答したのは、男子 34.5%に対して、女子 14.1%であった。さらに、「物理」が「好き」と回答したものに限って、性別に大学の専門領域をみたところ、男子は 68.1%が理工学系統に進学しているのに対して、女子は 43.2%と 20 ポイント以上の差があった。ここでも、女子は「物理」が好きな者が少ないうえに、たとえ好きであっても理工学系統への進学者が男子に比べて少ない様子がうかがえる。